そして罪人は去っていく　～Endless journey~

双和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そして罪人は去っていく　～Ｅｎｄｌｅｓｓ　ｊｏｕｒｎｅｙ～

【Ｎコード】
Ｎ３３４６Ｖ

【作者名】
双和

【あらすじ】
永遠に旅をするという罰を与えられた罪人が、その罰の執行を見届けるためのお目付け役の執行官と様々な国や村、場所を旅するお話。

0．自戒の夢

0．自戒の夢

真っ暗。何もかもが黒で覆われた空。いや、海のような場所。
そこに、彼は浮かんでいる。ただよっている。
ぼんやりと寝ぼけたような顔だが、目を開き意識はあるのか、ただただ、浮かんでいる。

立ち止まってはならない。

不意に、どこからか男なのか、女なのか、判然としない声が響いた。
そして、その声は反響し、どこまでもどこまでも繰り返す。
まるで、呪文のように、淡々と。

立ち止まってはならない。
永遠にアナタは旅を続けなければならない。
誰かを見捨てても見殺しにしても。
アナタは立ち止まってはならない。
進み続けなければならない。
例え、その先に得難い幸福があり手にしたとしても、手放してでも進まなければならない。
どんな不幸も幸福も、手放してでも進まなければならない。
何故ならば、アナタには立ち止まることは許されない。
それが、アナタの罪への罰であり、アナタが唯一できる贖罪だから。

その声をぼんやりとした顔のまま、彼は黙ったまま聞いていた。

ただただ、闇の中でたゆたったまま。
その呪文を、彼に対する判決を受け入れる。
それが、彼にとっての今できる全てだから。
ゆっくりと彼は目を閉じ、言葉を噛みしめるように耳を澄ます。
何度も何度も繰り返される、その言葉に。

アナタは永遠に旅をし続けなければならない。
それが、アナタの罪への罰であり、アナタが唯一できる贖罪だから。

1－1

1－1.

晴れた青空の下、レンガで舗装された街並みを二人の若い男女が歩いていた。

その二人の格好―着ている服は、周囲の人々とは違い、それによってすれ違う人々に様々な意味合いの視線を向けられているのだが、二人とも慣れているのか、はたまたそういったものをまったく意に介さないたちなのか、涼しい顔で歩いて行く。

「やばい。氷菓子の屋台を、前方に発見」

そんな二人が街の中央の宗教施設前、中央に噴水のある広場に差し掛かった時、女の方がそうつぶやいた。彼女の言葉通り、広場に設置されたベンチの近くに、リヤカー式の氷菓子の屋台があった。そして、立ち止まってしばらく考え事をするように目を閉じた後、にこやかな顔をして屋台の方に駆け寄っていった。

その様子を、同じように立ち止まって眺めていた男の方は、そんな彼女に深くため息をついた後、めんどくさそうにその後を追う。

男が追いついた時には、すでに女は屋台のおっちゃんに注文をし終わっており、何やらおっちゃんと世間話に花を咲かそうとしていた。

そこに、この辺りの人とは毛色のまったく違う格好をしている女と、似たような格好をしている男が近寄ってきた。よって、屋台のおっちゃんは男を彼女のツレとすぐ判断したようで、男の方にも声をかけてきた。

「よう！　兄ちゃん、この子の彼氏さんか？　兄ちゃんも、どうだい？」

「いや、結構だ。後、こいつとはそう言った関係じゃないよ」

商売人魂たくましく、男にも氷菓子を進めてくるおっちゃんに、

男は苦笑しながらそう返す。
女の方はというと、その言葉にまったく気にしたそぶりも見せず、おっちゃんが用意している氷菓子に視線を集中。楽しみなのか、幼子のように笑っている。
大きな氷の塊を削り、雪のようにした後に器に山盛りにし、赤く色づけされた甘いシロップをかける。さらにに、木を削って作ったスプーンを付けて完成。
そいつをおっちゃんから手渡されると、おっちゃんに軽く頭を下げた後、女の方はすぐそばのベンチに腰掛けて食べ始めた。
それを、半ばあきれるように男は眺めていた。そして、そんな男の目の前に、すっ、とおっちゃんの指の太い手が差し出される。
怪訝に思い、おっちゃんに男は顔を向ける。
すると、そこにあったのはプライスレスの営業スマイルで。
「勘定。嬢ちゃんから、アンタ持ちだって聞いてるぜ」
「……」
しばらく、無言でいた後、男は疲れたように肩を落としながら、先ほどよりも深いため息をついた。

1―2

平和な感じの国ですねー」
「そうだな」
そう呟いた女に、男はそう返す。
結局、氷菓子の代金は男が払い、二人してベンチに座りながら、二人は道行く人々を眺めていた。
たまに、自分たちとは違う格好の二人に訝しげな視線を向けられるが、特に誰も何も言ってこず通り過ぎて行く。
すぐに食べ終わった氷菓子の容器を、スプーンで行儀悪く叩いて鳴らしたりと、女の方はかなり自由な感じにふるまっている。
対して男の方はというと、特に言うこともなくベンチにもたれている。
ジリジリと太陽光が二人を焼くように降り注いでいるが、二人は別段それでも日陰に移動しようともせず、道行く人々を眺めていた。
「キリ的には、この国をどう思います？」
そう女は、自分の隣に座る男に話しかけた。
その声に、キリと呼ばれた男は視線を女に、自分の旅の同伴者である彼女―エンへ向けた。
すると、そこにあったのは底意地の悪い笑顔で。
まるで値踏みするような、否、単なる加虐心がそこにあった。
「相変わらず、ろくでもない笑顔をするな、お前」
「そりゃ、キリをいじめるのは楽しいですからね。笑顔にもなります。」
けれど…、そう仕切り直すようにエンは視線を広場の雑踏に戻し、話しを進める。
「楽しいからという理由以外に、これはアナタに対する罰でもあるから、確認しとかないといけません。それが私の職務ってやつですから。ねえ、キリ。アナタは…」

このような平和な国で日々を過ごしてみたいとは思いませんか？

その言葉に、彼女に向けていた視線を俺も雑踏に戻す。
道行く人々は、それぞれ様々な表情をしている。
笑顔だったり、泣き顔だったり、怒っていたり、焦っていたり。
どこにでもある、ありふれた日常。
だが、そんな日常に俺は参加することができない。
よくて、ゲストである。
何故ならば、俺は旅人だから。
永遠によそ者だから。
彼らの日常において、俺はどこまでも異物なのだ。
旅人のままでは、ずっとそのまま。彼らと同じ日常を過ごすには、彼らと同じステージ―仲間である、この国の国民にならなければいけない。
だが、俺にはそのことは、どうあっても許されない。
この国でなくても、そこがどんな楽園のような国であっても、そこにどうしても手放したくないものがあろうとも。
俺には、その国にとどまることは許されない。
何故ならば、それが、罰。
罪人である俺に与えられた、罰。
いかなる理由、感情があろうとも、絶対にとどまる―旅を終えることは許されないという刑。

俺は、自分の生まれ育った国で、ある重大な罪を犯し、捕まった。
これは、罪に対する罰の旅だ。
俺の隣で笑う彼女―エンはその刑の執行官。
俺が、どこにもとどまることができないように見張るために、俺と共に旅をする執行官。
だからこそ、様々な国や村、場所を訪れるたびにエンを聞いてく

る。
罰を。俺に対する罰を絶対に忘れさせないために。
問いに答えを返さない俺に、別に不平を述べるでもなく、エンはただ雑踏を眺めている。
そして、結局、俺はその時、その問いの答えを返せなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3346v/

そして罪人は去っていく　～Endless journey~

2011年7月31日03時25分発行